

第二章 ^{平洋} 大東亞戰爭間における大平宮鐵道作戰指導の概要

第一節 開戦より昭和十七年夏頃迄における鐵道作戰指導

一 本期における鐵道作戰一般の経過

昭和十六年十二月八日米英に對する戰を宣し、東に 米國大平洋艦隊を

真珠灣に奇襲し、西に 馬萊半島 上陸作戰を敢行 南方領域 戦定の火

蓋を切つた。我陸海軍の作戰は引續いて順調に進展し、昭和十七年

二月十五日 ^{マニラ} レンガポ ^ル を陥落せしめ、更に ^{スマトラ} マニラ ^ル 瓜哇 緬甸 大島と

次々に南方各地を攻略 概ね 昭和十七年五月迄に南方作戰の第一

段階と終り、今後防衛作戰に移り、軍政の段階へ入つた。
之に應ずる)

本期に於ける鐵道作戰は先づ其第一般作戰に即應じ南方鐵
道を占領開拓し、之等一般作戰を推進し且尔後の教を備を行
ふ事か急務であつた。其の主なものは次の様なもので、大本營鐵道作

戰指導の重要とす處理する。

1. 南方作戰に應ずる鐵道の占領開拓
2. 南方占領鐵道の復舊対策
3. 南方鐵道管理機構の確立

4. 鐵道管理要員の編成派遣

かくて南方鐵道は逐次整備される行つたか太^{平洋}東^洋戰^争の南方政策の根

本^邦の^{防務}の^{増強}の^{爲め}の^{消耗}を^来さ^{ざる}事^を方針^{とし}て^居る^{關係}上^右の^種な^各

種^の指導^も專ら^{人的}處置^に限^る資材^的には^{殆ど}見^えな^から^ない^{もの}か

無^から^ない[。]

此の間滿洲に於ては南方作戰開始後ニ面作戰の生起を極力警戒

し、北方に對する防壁として未だ對蘇主動作戰が堅持せらる鐵

道作戰の見地からも大陸重點の考へ方は依然として変化なく

1 霍里線の迅速建設

2 哈牡線の複線化促進

3 大陸鐵道の軍事使用に關する勅令の制定

4 特設鐵道隊の編成準備

等の對蘇作戰準備は着々と進められ、（おしり） 實質的には、（に應ずる） 北方の大空軍の

鐵道作戰指すの準備があつたと云ふ。

一方支那に於ては、（開闢） 共に香港を攻略し、次ぐ第三次長沙作戰と

敵行への南方作戰ニ策應するところがあつた外、大なる作戰を見ず、専

ら戦力の擴充と治安の確立に努力が續けられ、行なはれ、昭和十七年六月に至る、大陸航空基地の復滅を目的とし、浙贛作戦が開始され、更に南方作戦の一段落に伴って、重慶撃滅の進攻作戦が企圖され、遂に其準備に入った。之等の作戦に即して大本營は滿洲より鐵道部隊を特用して、浙贛作戦に協力せしめると共に、對重慶の進攻作戦準備の進捗に隨ひ、其集中輸送山西鐵道の増強等鐵道作戦準備に遺憾なく、一むるやう處置する所ありき。

昭和十七年

此の間内地に於ては、四月十八日航空母艦よりする米航空隊の初め、東

兵を空襲衣（空襲衣）の外何等敵の妨害を受くる事無く車より生業を擴充
に之のほかに 鐵道作戰の見地からは 對蘇輸送の準備上 船舶の
不足を早期に 閉門隧道の完成促進、北九州役道の強化等に關
し軍用鐵道者の要望を以て外見するヨレはなかつた。

以上の様に鐵道作戰乃至其準備も逐次進められて行くとは之の國庫
全般として之に對する關心乃至考へ方は極めて低調消極的の資
材の配當も 將來作戰準備として鐵道部隊の増強等も強じ見る可
しもの無く全く本戰中の中期末期の作戰指導に即應する基礎を

確し得なかる。勿論国家物動計畫の全般的愈弱に其れもの

とは之入鐵道作戰の本質を見え遺憾至極と云は可なるなり。蓋し

鐵道作戰は遠く作戰進歩の時代こそ重要あり、作戰の實施

に際しては單に其簡便性に依るに過ぎないからである。

二、南方鐵道

I 作戰の進展に伴ひ鐵道の占領及復舊

前述の如く南方作戰は馬來作戰を始めとしてスマトラ、爪哇、緬甸、比島

と順次に進められ、其の間は、作戰の進展に依るに鐵道に依存しては

馬来作戦 次び緬甸作戦が マニラ 瓜哇 比島等は 攻め落す後の速
なる復旧を期待するに止まり 作戦遂行のためには 大なる期待を掛け
た。 此為之に充てる 鐵道兵力は 次の様である。

馬来作戦

第三鐵道輸送司令部

鐵道監部 一

鐵道二箇 隊

特設鐵道隊 二

鐵道材料廠 一

陸軍

緬甸作戦 鐵道監部 一

鐵道二端 取込

馬來半島 (甲)

鐵道材料廠の一部

スマトラ作戦 鐵道一 中隊

爪哇作戦 鐵道二 中隊

比島作戦 鐵道一 中隊

之等の鐵道隊は概ね所期の目的を達し作戦終了と共に鐵道復旧の段階へと入る。鐵道破壊の目取も大半は比島が其他の諸

鐵道は之に比較すれば誠に甚微が緬甸鐵道の若干の大橋
梁を修理不能の狀態に達破壊しとある外特に大なるものはな
つた。之の爲大事官は比自山鐵道に対し内河鐵道有るは復旧修
理班を編成し之現地を派遣し其外既に現地にある鐵道第六段
場と共に復旧に任ぜられ、^{（たか）}其他の地域に対しは^{（其後）}逐次派遣される鐵道
管理要員と現地にある鐵道部局で之に當る概ね順調な復旧を
見ることが出来た。

II 鐵道の管理

南方作戰の終りに伴って南方軍政機構の整備さるゝと共に鐵
 道管理機構を如何にするかの問題が省部間の重大問題となつた。
 占領後道は軍之と管理し且其業務は内地に派遣する鐵道管理
 理事員を決行する事は開戦當初からの既定方針で
 あるが軍政との關係は未決定で統帥部と陸軍省との意見
 対立し容易に決定を見よたに至らなかつた。
 即ち陸軍省が「鐵道は軍政の部と」其管理要員は軍政
 監に選任せしむべし」と主張するに對して統帥部は將來の南方

防衛作戰を考慮し、「南方使道は作戰鐵道とし飽く迄
岩澤部に於て作戰兵站の部とて運営せし」と主張し、
更に譲るゝこと。

このやうな意見の對立も軍中央部に於ては何れも決定と見え、三
ず使道は現地軍一司令官自らの管理に属せしめ其細部は監
げり現地に任ずるに決し夫々及命令を見た。

かく當時軍政策の情勢にある現地軍は各地其使道の管
理を軍政監に任せ其管理専門員を軍政監の指揮下に入らしむるに

至つたが僅かに緬甸鐵道の鐵道部隊を以て作戰兵站の部として運籌せられた。

この様な 僅少に重要な鐵道輸送力の所要部分を直

接作戰の用に供せしめ 軍政を通じて南方の作戰及統治全般に

寄與せしむの論議は両者の要求を同時に充足し得なかる。南方諸役

達の事情に當然な事ではこの關係は情況の亦及隨に伴つて常に西

者の調劑を必要とし 南方諸地域の米穀の反攻による本格的に

防衛作戰態勢へと移行するに及んで必然的に鐵道は軍參謀部

自らの管理する所となすに至つた。

Ⅲ 鐵道管理要員の編成派遣と管理機構の確立

鐵道管理機構の決定に 右の様な経緯を見つゝ大本營は作戰の進展に

逐次

伴ふ内地鐵道有る之が管理要員を編成し夫々現地に派遣して行ふ

此等管理要員は各地共鐵道の運用にはずる少數の幹筋と現地機関の中

堅となす極一部の要員から成り其身分は軍属であつた。

軍属となす身分に義は當時国内官民一般特に鐵道者に於ては又那

事度の経験から其待遇の不当を主張し之を好まず等しく従軍す

るならば軍人として従軍一度希望を有し居り部内に於ては開戦前後を通じて特務軍人制度の制定が研生せられるに實現を見るに至らず僅かに軍属の一部に職務上の指揮権が認められたに過ぎなかつた。かく此等の管理要員は現地に於て軍政監の指揮下に入り軍政監部、外局として鐵道總局又は鐵道管理局を編成し鐵道の管理經營に當つた。此處に鐵道管理様構は一應確立を見たとある。

IV 南方鐵道に対する資材的施策

前述の様は南方鐵道に対しては其占領復旧管理のその各種の處置が採ら

小石が此等は概ね人的施策に止まり、資材の注入補給は殆ど行はれなかつた。

大本営は

もつとも開戦當時鐵道復旧用にと概ね左の程度の資材を準備

したとあるが、之とて作戦には殆ど使用されず、作戦終了と共に北方への

其大部を

活用を考慮して大本営予備資材として南方軍に保管させた。

左記

軌道材料 約一〇種

重構桁鐵道橋 二八組

其他修理資材 若干

南方作戦の一段落と共に伴う大本營の北方重視の傾向は愈々強く鐵道資材の北方移用は 單に石の様な作戦用資材のみならず南方鐵道の一部を移り撤去して迄計畫準備された。

此の様な一般的考へ方の戦争第三年以降に於ける南方役者衰損の原因をなし戦争第三年に及んで同地も一部に資材の注入を計畫したか、定数表の激化と相俟つて時期既に過ぎし、観を呈して行きた事は誠に遺憾であった。

即ち南方役道は之を大観して戦争終年に於て独力に之

を復旧し、翌二年、目につく独力に之を維持し、翌三年、以降

次原料の面から逐次、ドリル、金に隔ると思ふべきであらう。

三 鮮満鐵道

對蘇戰に應ずる

南方作戦の華やかな進展を拘らず、鮮満鐵道の鐵道作戦準備は依

然、大本營の重層的施策として推進される。

即ち従来から對蘇進攻作戦用として滿洲に集積してある軍法具材の、時流

用を認め、哈牡線の複線化を促進し、又昭和十七年六月には、その追

進である大陸鐵道の軍事使用に關する勅令を公布する迄になつた。

この勅令は「戦時」際し「軍」は「満鐵」に対し「軍事上」の命令をなすことを「得」同
時に「朝鮮」「樺太」「台湾」「三鐵道」に対し「軍事輸送」に關し「當該鐵道局長」
を「指揮」することを得る「法的根據」を確立したるも「軍」の「鐵道運用」に
劃期的勅令である。この勅令の制定に伴ひ「従来」大體「鐵道」と「參謀」
本部間に於て「協儀」の形式を取るを「鮮」「滿鐵道運用規定」も改之の
要を認め、「鮮」「滿鐵道戦時准滿規定」と之改之し「陸軍」一指
示したる。この「戦時准滿」なるもの「專ら」對「蘇作戦准滿」を目標と之
「居る事」は「云ふ迄」も「無い」。

此の間、^更軍軍とては、^{各種の状況に應ず}、南緯線の迅速建設、集輸送、具体的研究

鮮満鐵道より編成する特設鐵道隊の具體的計画

滿鐵改組等、着々として作戰準備を進めり行きた。

四支那鐵道

I 浙贛作戰

昭和十七年四月十八日 航空母艦より及んだ米機は東京地方を空襲

し其一部は浙贛地区に飛行場へ着陸した。

対日空襲表の

昭和十七年六月開始たる浙贛作戰は之等航空基地を復滅を

目的として行はれたるものあり、六月より七月初旬にかけて玉山、贛州、臨

陸軍

水等の航空基地を占領破壊して一應其目的を達したか結果から見ると鐵道資材の取得作戦の觀を呈し 同年八月迄に浙贛鐵道の大部を撤去し 軌道材料一重軌條約百三十五軒一を取得した此の爲大本營は滿洲から鐵道監部一鐵道隊一と地用一を其鐵道作戦に當せた。此等の鐵道部隊は松柄の兩期に遭遇して各河川の^出水^を氾濫^{させ}、^甲を^{よく}奮^闘し^右の^確な^成果^を収^得し^{けた}と^あつた。

此等の取得資材は各々計画通りあつた五隊作戦用とす

充ちざる計画であるが、其作戰の取組めと共に北方作戰準備
用として満洲へ特設した。

五號作戰準備

南方作戰の一段落と共に研究を進められた對重慶進攻作戰は

之を五號作戰と呼ぶ。主作戰を陝西省より閬谷間を経る重慶

成都に指向し、一部支作戰を揚子江に沿ひ重慶、貴陽に進むる

計画である。其の爲に北支に於ける鐵道が重要な役割を務めなければ

ならぬ。

即ち

此の作戰は南方作戰と異なり所謂大陸作戰が其集結の始

て兵後の補給補充等後方連絡を専ら鐵道に依存し又之の

本作戰成否の重要な鍵となる關係から鐵道部門としては南方

作戰以上に重要性を持つものとす大本營、現地相呼應し直剣

研究準備に入る

1 南方内地 滿洲 集結の輸送

2 山西鐵道の増強

3 西部—騰海線の占領復旧

逐次
善計画を進め山西鐵道の増強の如きは一部実施に入つた。

此の作戦も昭和十七年七月米軍のガカムカケン島の上陸を契機

とする東部太平洋戦局の变化による逐次之を放棄する結果とな

る実施と思ふべきである。

五内地鐵道

太平洋戦争以前陸特演輸送に引續いて南方作戦の準備期より

開戦初期に亘り作戦目的の集中輸送を比較的全裕を以てした

る内地鐵道は各方面に對する補充輸送と共に鐵道の總

兵站とて南方鉄道に基す。鐵道管理委員の編成派遣等に其心カカ^が西女
請^さル^る。

同時に大本營は船舶の消耗と考慮して北方作戰準備の見廻りから

陸門鐵道。運進 北九州鐵道の整備——を鐵道省に要望する所

があるか。一方鐵道省としても冬季の生産擴充船舶運送の消耗が

る鐵道への輸送増強（之を陸送増強又は陸運増強と呼ぶ）

に即應じて鐵道輸送力の擴充を企圖し逐次之が整備と進め

て行つた。併し何れも軍としては前線整備主義を採り、南

方に引かれ、北方作戦準備に専念し、鐵送者。此等の
企圖に對しては、若干の支援を與へると云ふ程度に過らぬが
了。

第二節 昭和十七年秋期より米軍のレーテ上陸前頃迄に

於ける鐵道作戦指導は

一 本期に於ける鐵道作戦一般の経過

南方作戦の一段落と共に、國軍は全般に亘り其能く教ふるに劃期
的に兵備を強けしめ、次期作戦に應ずるとし、
方に於て對重慶を進攻